

最高だった学生時代

看護福祉学部
看護学科

准教授 伊藤 道子



私は看護学校を卒業した年に、助産師を目指して国立大蔵病院附属看護助産学校助産婦科へ進学しました。母校は平成10年3月に閉校し、現在その場所には国立成育医療研究センターが建っています。厚生省(当時)の学校なのに、「大蔵省」とどんな関係があるんだろうと思ってたよね、と入学後に同級生と話していたのを記憶しています。国立病院で最初に設立された助産課程だと知ったのは入学してからです。北海道から沖縄まで学生が集まっていました。

就学中の1年間、世田谷区大蔵の広大な病院敷地内にある全寮制の学生自治寮で24名の学生の一人として過ごしました。秋桜寮と命名された寮は、私が入学する数年前に教育主事を務められた松本八重子先生が、助産学生の実習のために設計段階から携わられた建物だったと伺っています。二人部屋でしたが、居室の各ベッドにインターフォンが設置さ

れていました。夜間のオンコール分娩実習の連絡は就寝中のベッドで直接受けて、心臓をバクバクさせながら病棟へ直走ったものでした。

大蔵出身の卒業生でよく話題に上るのは、保健教育のグループワークです。母親学級、退院指導、家族計画のいずれかのチームに所属し、1年間計画立案・実施・評価を繰り返す学習活動です。私は、家族計画family planningチームに入りました。寮には、学生全員が集合できる部屋の他に、少人数が利用できる部屋がいくつかありました。大所帯の母親学級チームは大きな部屋で、少人数の家族計画チームは小さな部屋で、夕食後から夜中まで何度も話し合いました。プログラム案や説明原稿、媒体を提出した日は、毎回約2時間授業後の夕方から当時の教育主事青山広子先生から指導を受け、メンバー皆がうなだれて半分涙目になりながら寮に戻り、また深夜まで話し合うという日々でした。その間にオンコール実習をこなしていたのですから、我ながら驚きです。今振り返れば、若さだけでなく、24時間生活と学習を共にしてきた同級生が常に側にいてくれて、支え合っ

ていたからできたのだと思います。

北海道での看護師国家試験の1週間前、再結成したロキシー・ミュージックという洋楽バンドのコンサートを観たくて、アルバイトを貯めて日本武道館へ行ってしまふほど、中学時代から国内外のロック・ミュージックが好きだった私ですが、さすがにそのような余裕は全くありませんでした。夜は門限があったので、たまに週末日中の渋谷エッグマンでのトークライブに行くのが唯一の楽しみでした。このように回顧してみると、この一年間の時間経験は、気づかないうちに世間知らずの自分を逞しくさせたようです。



大蔵病院職員のパレーボール大会に学生として参加(後列右から2人目が私)

私の学生時代

今、大学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は伊藤准教授と本家教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

リハビリテーション科学部
作業療法学科

教授 本家 寿洋



私の学生時代は、作業療法という専門職を学ぶ上で、「何の悔いもない最高の学生時代であった」との一言に尽きます。そう思えるのはなぜなのかを簡潔に述べていきたいと思います。

～ 最高の恩師との出会い ～

「みなさんは作業療法学科に在籍しているので、他の領域への関心は今すぐあきらめて学業に集中してください」の言葉は、新学期早々に担任教員がおっしゃってくださった一言です。進路の迷いがあった当時の私は、この恩師の一言を

きっかけに充実した学生生活を送る覚悟を決めました。またある先生は、「歌って踊れる作業療法士になりなさい」と講義で話しました。私はそれを真摯に受け止め、クラブハウスを貸し切った飲み会では、サンパホイッスルを持参して盛り上げました。北大名物のジンパ(ジンギスカンパーティーの略です)では、先生方から人との強い関係性がいかに大切かを学びました。

～ 最高の先輩・同期・後輩との出会い ～

「来週からのゴールデンウィークだが、5泊6日の北海道一周の旅に出よう。観光地にはない、自分たちで美しい景色を探す感じるツアーだ」と新歓コンパの時に先輩に誘われ、先輩4人と同期3人で旅に出ました。1日平均500～600kmを車で走破し、夜は3時まで語り、車の中で寝て、朝は7時起床し、4日目には、7時間飲まず食わずの徒歩でカムイワッカの滝を雪の中往復し、精神的・身体的にも非常に辛い旅でした。そして夏休み、再び先輩から「今度は10泊11日北海道一周キャンプの旅だ」と言われ、15人程度で出発しました。そうして、ゴールデンウィークは5泊6日、

ゴールデンウィーク5泊6日の旅～富士山にて～(右側が私)



クラブハウスを貸し切った先輩との飲み会(手前真ん中が私)



夏休みは10泊11日の旅が定例となったのです。なぜかはわかりませんが、このような大変な旅を乗り越えたおかげで、全ての経験や学問が作業療法に通じるのではないかということを感じました。

～ 激しく生きたと実感できる学生生活 ～

親からの金銭的な援助を全く受けない学生生活でしたので、月～金は、授業は休まずに、塾講師と家庭教師のバイトに明け暮れました。そして、土日は先輩・同期・後輩と時空を共有し(女性との交際は、する時間がないのでしないと決めた)、定期的に野球やバレー、フルマラソンや50kmの国際スキーマラソンへもみんなで参加して、とにかく激しく感じ、考え、動いた学生生活でした。このことから人が充実した人生を送るためには、意志をフル活動させることが重要であることを実感しました。



ジンパの写真(真ん中が私)